



清姫は、滝尻王子の前で、巡礼の人たちにマクワウリを切って配っていた。

そうしながら……安珍が、今、現れるか？今、現れるだろうか……？と待っている。

清姫は、一番、お気に入りの薄い浅葱色の単衣を着ている……足には、赤い鼻緒の草履を履いている……髪の毛は、きちんと結んでまとめ……花を差してある。つまり……あまり、目立たない程度に……お洒落をしていた。

降り続いた雨が上がった……もう、今日にでも、安珍は……帰ってくるはずだ……。

心の中は……ウキウキ、ドキドキしている。御山から戻って来る巡礼の人たちに……「安珍を見なかった？安珍はどこ？」……と、大声で聞きたい。

……でも、もちろん、そんな事は、恥ずかしくて出来ない。

「うまいウリじゃなあ……。よう冷えている。こんな暑い日にはこたえられんわ……。」

今しがた……滝尻の参拝を終えた僧が、マクワウリにかぶりつきながら、嬉しそうに言った。

話しやすそうな僧だなあ……。と清姫は思った……。

「この下の石船川で冷やしているんです。この里で穫れたウリなんですよ。」

「ほーっ……。そうか、その心使いが、嬉しいなあ……。」

「お坊様は、御山を参詣されてのお帰りですか？」

「そうじゃ……。よくわかるのう……。」

清姫は思いきって聞いた……。

「背の高い若い僧に会いませんでしたか？」

「それは……。安珍さんの事かな？」